



こんなことあったよ！ のしろ白神ネットワークの活動レポート

令和4年10月31日(月)
米代川河川敷伐採木で木炭製造 編

米代川の下流域は河川敷が広く、そこにヤナギなどの早生樹が繁茂しているのを多くの方がご存じと思います。河川敷内の樹木は、洪水の際に流れを阻害したり、河川巡視時に監視の妨げになったりと、普段はあまり気にならない状況も、50年に一度、経験したことがないような大雨・・・など、万が一を考慮した整備が必要となっているようです。

能代河川国道事務所では、こうした樹木の伐採を定期的に行うとともに、その伐採木の有効活用を進めています。皆さんの中には、無償提供の木材を貰い受け、燃料などで使っておられる方がおられるのではないのでしょうか。木高研では、伐採された樹木のうち5cm以下の材や枝を原料にして木炭を製造してみました。

どうして木炭を作ろうとしたか？ですが、樹木は、大気中から二酸化炭素を体の中に取り込みながら生長しています。例えば突飛ですが、樹木は二酸化炭素の詰まった缶詰と言って良いのです。炭にすると、樹木は熱分解してなくなっていきますが、その2-3割は難分解性の炭素の塊（木炭）として残すことが出来ます。つまり、炭にすることは「大気中の二酸化炭素を安定した炭素の形で貯蔵する（隔離する）手段の一つである」という視点です。「大気中の二酸化炭素を隔離」するテクニックと理解すれば、古くさい炭焼きが未来を支える最先端技術だと想えませんか？

炭焼きには組み立て式の簡易製炭器2台を使いました。組み立ては簡単でした。樹皮が青く未だ水分がかなり残っていると思われた炭材（約4m³）を使いましたが、約3時間の作業でほとんどを炭にすることができました。消火は散水して十分に温度を下げました。事前に、能代河川国道事務所への「河川敷地の一時使用届出書」、消防署への「火災とまぎらわしい煙又は火災を発生する恐れのある行為の届出書」の提出とともに安全には注意して作業しました。なお、得られた木炭は30Lの土嚢袋で19袋ありました。

文： 栗本 康司



河川敷の樹木の伐採(能代河川国道事務所提供)



風弱く、気持ちの良い青空が広がる絶好の炭焼き日和。組み立て式の窯を設置します。長さ1mに切り揃えられた枝が1×4m分用意されていました(上)。火力の加減をみながら、どんどん焼いていきます(下)。



細い枝も混じていましたが、午後にはちょうどいい大きさの炭ができました(上)。水をかけて冷まし、土のう袋に入れて能代河川国道事務所まで運びました(下)。活用実験は、このあともまだまだ続きます♪